

資料2 琵琶湖定点定期観測データ（平成23年度）

調査員：大山明彦・大前信輔・森田尚・太田滋規・岡村貴司・竹上健太郎

琵琶湖定点定期観測調査法および分析法

表1 気象および水象

表2 湖水温

表3 透明度

表4 pH

表5 溶存酸素量

表6 酸素飽和度

表7 化学的酸素要求量(COD)

表8 アンモニア態窒素($\text{NH}_4\text{-N}$)

表9 亜硝酸態窒素($\text{NO}_2\text{-N}$)

表10 硝酸態窒素($\text{NO}_3\text{-N}$)

表11 有機態窒素(Org-N)

表12 リン酸態リン($\text{PO}_4\text{-P}$)

表13 全リン(T-P)

表14 塩化物イオン(Cl^-)

表15 ケイ酸(SiO_2)

表16 クロロフィルa

表17 プランクトン沈殿量

表18 植物プランクトンの出現種

表19 動物プランクトンの出現種

琵琶湖定点定期観測調査法および分析法

1. 水象

- 1)魚探水深：魚群探知機
- 2)水色：JIS 色票（日本色彩センター製）
- 3)水温：自記記録水温計（アレック社製 COMPACT-CTD）
- 4)透明度：セッキ-円板

2. 水質

- 1)採水：6リッタ-容バントン採水器（離合社製）
- 2)pH：ガラス電極法（HORIBA 製 pH METER F-22）
- 3)溶存酸素(DO)：ウインクラー-アジ化ナトリウム変法¹⁾
- 4)化学的酸素要求量(COD)：100において過マンガン酸カリウムによる滴定法²⁾
- 5)アンモニア態窒素(NH₄-N)：イントフェノールによる吸光光度法²⁾
- 6)亜硝酸態窒素(NO₂-N)：スルファニルアミド・ナフチルエチレンジアミンによる吸光光度法²⁾
- 7)硝酸態窒素(NO₃-N)：ヒドラジン還元法³⁾による還元後、スルファニルアミド・ナフチルエチレンジアミンによる吸光光度法²⁾
- 8)有機態窒素(Org-N)：ケルダール変法(ケルダール法¹⁾)による前処理後、中和滴定法¹⁾
- 9)リン酸態リン(PO₄-P)：モリブデン青[塩化スズ(+)還元]吸光光度法¹⁾
- 10)全リン(T-P)：硫酸、過塩素酸による分解、アンモニアによる中和後、モリブデン青[塩化スズ(+)還元]吸光光度法¹⁾
- 11)塩化物イオン(Cl⁻)：チオシアン酸水銀(+)吸光光度法¹⁾
- 12)ケイ酸(SiO₂)：モリブデン青吸光光度法⁴⁾
- 13)クロロフィルa：Scor/Unesco 法

3. プランクトン沈殿量 24時間の自然沈殿容積法

4. プランクトンの計数

1)植物プランクトン

北原式中層定量ネット(ネット地は NXX14)で垂直曳き(曳網速度 0.5m/s)して採集し、未固定で検鏡して細胞数を計数。

2)動物プランクトン

北原式中層定量ネット(ネット地は NXX14)で垂直曳き(曳網速度 0.5m/s)して採集し、5%ホルマリン固定後、検鏡して計数。

プランクトンの採集は、下記のように層別に分けて行った。

採集層 0~10m(全地点[但し地点 , は 0~5m]), 10~20m(地点 ~),
20~40m(地点 ,), 40~75m(地点)

文 献

- 1) 日本規格協会(1998)：工場用水試験方法 JIS K0101
- 2) 日本水道協会(2001)：上水試験方法 2001年版
- 3) 三宅泰雄・北野康(1960)：水質化学分析法 1版
- 4) 日本水道協会(1978)：上水試験方法 1978年版